
死神はあなたよ！

岳石祭人

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

死神はあなたよ！

【Nコード】

N9399C

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

「あなたは死の運命から逃れられない。避けようとすれば、誰かが巻き添えで犠牲になる」教祖様と呼ばれるクラスメートの予言。実際に人が死に、中学生里香は怨霊に襲われる。孤立し、自分さえ自分を信じられなくなり、里香は助けを求めた、驚異の霊能力者、紅倉美姫に。果たして、死神は、誰か！？

死神はあなたよ！

第1章 ホームにて

なんの前触れもなく、

小岩井里香こいわいりががその異様な感覚に襲われたのは駅の改札を通った瞬間だった。

とっさに、

『逃げなくちゃ』

と思った。身内から強烈な危険信号が発せられている。

しかし、何が、里香にそう思わせているのか？

時刻は7時になるうとうとところ。Y線のN駅。帰宅の途にあるサラリーマンOLでホームはごった返しているが特に異常は見えない。

里香は中学2年生。自宅がリフォーム中で今は電車で2駅離れたウィークリーマンションに一時越している。

里香は辺りに注意しながら電車を待つ列の後ろについた。

身内からわき上がる不安はどんどん膨らんでいき、足元をおぼつかなくしている。人の動きに肩を押されただけで里香はよろめき、列から大きく外れてしまった。年輩の男性が不審そうな目を向けた。里香の胸の動悸はどんどん大きくなっている。あごが震えて歯がカチカチ鳴った。

『何？なんなの？』

しかし辺りをどんなに見渡しても原因は見つからない。

不安は際限なく膨らんでいき、体がフラフラ感覚を失い、せつぱ詰まった焦りがフルボリュームのサイレンのように内耳を圧した。

『逃げなくちゃ』

何から？どうして？

年輩の男性がまた里香を見た。変だと思われる。

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

しかし、どんなに理性的になろうと努力しても、巨大な不安感に神経を麻痺させられ、『逃げなくちゃ』という思い込みが里香の体を突き動かした。

里香はむりやり人の列を押し分け前に進んだ。怒りの声上がる。かまわず人をかき分け前に進む。逃げなくちゃ、逃げなくちゃ、逃げなくちゃ。

どこに？

逃げ道を探って里香はがむしゃらに前に出た。

不安が、恐怖が、危険が、

里香を追ってくる、

後ろから、右から、左から。

前へ、前へ、

逃げなくちゃ、

ここから、

逃げ出さなくちゃ！

ぼっかりと、空間が開けた。

飛び込め、

逃げなくちゃ！！！！

「あなた」

里香はグツと腕を掴まれ、思わぬ強い力で引き戻された。

里香の足が空間をかいた。ホームの端。あと一歩で線路に飛び降りるところだった。

里香はこわばった顔で相手を睨んだ。

「どうしたの？落ち着きなさい」

長身の女が真っ黒なサングラスを外して里香を見つめた。

里香はふわふわ頼りない感覚の中で小さな驚きを感じた。

その女、綺麗な顔に落ち着き払った理性的な眼差し。

「あなた・・・知ってる・・・テレビで見た・・・」

死神はあなたよ！

女は小首を傾げちよっぴりおどけた表情を見せたが、ビクリと、きつい目になって横を向いた。列の先頭。ラッシュ時のホームは乗車口以外も第2第3の列が隙間なく並んでいる。場内アナウンス。『ただいま入場してきます電車は快速電車です当駅には停車いたしません。ご注意ください』

キヤー、ワー、と悲鳴が上がった。

パアン、と警報を鳴らし電車が入ってくる。

ゴッソ。

ザアーツと通り過ぎていく電車の、先頭、黒い固まりがたなびいていた。

ピチャリと頬に当たった液体を拭くと指が真っ赤に濡れていた。

「・・・・・・・・・・」

さつき通り過ぎていった黒い固まりがフラッシュバックする。

髪の毛・・・

女の人だった。

『ゴッソ』

耳の奥に衝突音が甦る。

女の人が電車に・・・

急ブレーキの音が鳴り響き、悲鳴がわき上がる中、里香は気を失った。

第2章 メール

「ええ、ええ。分かった」

女が携帯電話で話している。里香の視線に気付き、

「ありがとうございます。また後ほど」

ケータイをしまい、里香に笑いかけた。

「気分はどう？」

駅の医務室だった。

「ありがと・・・」

起き上がるうとするとうと頭がフラフラした。女は背中に手を回し支えてくれた。里香は薔薇の香水の匂いを嗅いでポツと頬が上気した。

「あ、ありがとうございます。あの・・・芙蓉・・・美貴・・・さん

・・・？」

女は丸椅子に座りベッドに起き上がった里香と向かい合った。

芙蓉美貴、

ふようみぎ。

最近テレビでよく話題になる霊能力者だった。

美人だ。

背中に流した真っ黒なロングヘア。トップモデル並の美貌。くつきりとした強い眼差し。20歳くらいに見えるが、たしかまだ高校出たての18歳のはずだ。

美貌の霊能力者と言うことで話題になるのだが、

彼女は、アシスタントだ。

彼女の「先生」は彼女に輪をかけてすさまじく・・・

ぼうつと見とれていた里香は芙蓉のじつと覗き込む視線にはっと我に返った。

「そつだ、あたし・・・」

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

「どうしてしまったのだろうか？」

「危なかったわね」

芙蓉は探るように里香の目を見ている。

「もう少しで線路に飛び出すところだったわ」

そして、あの女性のように・・・

里香はまた髪の毛と手に付いた血を思い出してぶるっと震えた。

「小川春香さん」

「え？」

「知ってる？」

里香は首を振った。

「そう。さっき亡くなった方。知り合いに調べてもらったの」

さっきの電話か。

「この人は教えてくれないから」

学校の保健室より狭い部屋。常駐の医師もいないらしく二人の他に誰もいない。

「小川春香さん。近くの商社に勤めるOL。年齢29歳。独身」

知ってる？と芙蓉はもう一度尋ね、里香はいいえと答えた。

「突然、線路に向かって飛びだしたそうよ。入ってくる電車を狙いましたように」

.....。

「自殺、のようね。断言は出来ないけれど」

芙蓉は黙って里香を見つめた。沈黙が重い。

「あなたは、どうだったの？」

「ち、違います！自殺なんて、そんな！・・・」

「そう。自分が何をしようとしているのか、自覚はあったの？」

「分かりません。ぜんぜん、分からないんです。突然なんだかすごく不安になって、とにかくここから逃げ出さなくちゃと思って、もう、とにかく怖くて、どうしたらいいか分からなくて、とにかく、逃げなくちゃって・・・」

里香はまたさっきの不安が襲ってこないか身構えたが、だいじょ

うぶだった。

「パニック症候群。」

閉所恐怖症とか高所恐怖症の類ね。専門家じゃないから適当だけど人混みで突然不安に襲われパニックになってしまいう人もいるそうよ」

「はあ・・・」

「たいていは何も出来ずに物陰にうずくまってしまいうケースが多いようだけど、線路に飛び出そうとするのはちょっと特殊かしら？」

「そうでしょうか・・・」

里香はうつむいた顔を上げて芙蓉に挑むように言った。

「わたし、今までそんな風になったことありません。それに、人が死んだんですよ？目の前で！ そんな、病気なんかじゃ・・・」

「じゃあ、なあに？」

「・・・分かりません・・・」

里香はちよつと恨めしそうに芙蓉を睨んだ。芙蓉は笑った。

「霊能者的見解を求めるのは、よしたほうがいいわね。わざわざ引き寄せることもないでしょう」

芙蓉の目に里香はゾクツと背筋が寒くなった。芙蓉はすぐに笑った。

「世の中の出来事なんてみんな霊的世界とつながっているし、心霊現象だって、理屈をこねればなんだって『科学的に』説明できるわ。要は、精神を健全に保つことがだいじね」

分かった？と目を覗き込まれ、里香はほつとした。

何にしろ、もう済んだことだ・・・

耳慣れた音楽が鳴った。里香のケータイの、メールの着信音だ。

どうぞ、と芙蓉がカバンを取ってくれ、里香はケータイを引っぱり出した。

クラスメートの真衣からだ。ピッ。

「な・・・」

死神はあなたよ！

里香は驚愕し、カーツと頭に血が上った。
「なによこれっ!」

里香のただならぬ様子に芙蓉も顔を曇らせた。里香は黙ってケータイを芙蓉に見せた。

『里香、もう死んでる？ それとも別の誰かが死んだ?』

「どういうこと?・・・」

さすがの芙蓉も困惑を隠せない。里香はケータイを引き寄せると真衣に電話した。すぐに出た。

『もしも〜し』

「真衣!このメール!どういうことよ!？」

『あれ?里香?〜なんだ、あんた、生きてるんだ?へえ〜』

鼻にかかったフニヤフニヤしたしゃべり方。むかつく。

『あ、じゃあさじゃあさ、・・・フフ、

誰か、死んだ?』

頭がジーンとしびれた。死んだ?そうよ、死んだわよっ!!

「ふざけてんじゃないわよ!どうして知ったのか知らないけれど、夕子悪すぎよ!」

『あー、うっさいなあー。てことは、死んだんだ、やっぱ。へえ〜』
呑気に感心している。腹立たしいが、里香はだんだん不安になってきた。

「まじめに答えなよ。どうして事故のこと知ってるのよ?」

クスツと小さな笑いが聞こえた。

『教祖様のお告げがあったのよ』

里香はギクリと固まり、再びカーツと怒りがわき上がってきた。

「松田さんが、何を言ったのよ?」

『教祖様と呼びなさい!』

そこだけ強い調子で言っつて、またフニヤフニヤのしゃべり方に戻った。

死神はあなたよ!

死神はあなたよ！

『教祖様が予言なされたのよ、あんたが今夜7時電車で飛び込んで死ぬって』

「……………」

『もし死ななければ、身代わりに誰かが死ぬ、って』

「身代わり？」

身代わり？

里香は心の中でもう一度言った。

あの女の人が自分の身代わりで死んだというのか？

また、あの光景と音がフラッシュバックした。

『おい、里香ー、聞いてる？』

教祖様はね、たぶんあなたは死なないだろうとおっしゃってたわ。代わりに誰かが死ぬ。

あなたが死ねばいいのに、ってね』

本気か？本気でそんな悪魔のようなことを言ったのか？

「……………いつよ？いつそのお告げがあったの？」

『えっとー、放課後、教室だよ。集会の時にね。ごめんねー、7時ちょうどにメールするつもりだったけど陽子と電話してて忘れてたわ。アハハ』

壁の時計を見ると7時50分になろうとしている。

「……………明日、松田さんと話すわ」

教祖様と、と言う声を無視して里香はケータイを閉じた。

芙蓉が眉を険しくして里香を見ている。

「教祖様って誰？」

「クラスメートです。」

まっだれいみ
松田麗美。

最近占いに懲りだして、それがけっこう当たるものだから女子たちで熱心な信者になる子たちがいて……………」

本当は、けっこう、どころじゃないのだから……………」

「ふうん。どんな占いをするの？」

「花札を使うんです。よく分からないけれどタロットカードと同じ

死神はあなたよ！

ように使うとか」

「花札。それはまた古風ね」

里香が問うような視線を向けると芙蓉は笑って手を振った。

「あ、わたしたちそういうのはぜんぜん別だから」

「見えるんですよね？ふつうに？」

「先生はね。わたしは感じる程度だけど。わたしたちが使う道具と言ったらこれだけかな？」

芙蓉はジャケットの内からシルバーのマスコットを取り出して里香に渡してくれた。

高さ5センチほどの女神の像だ。西洋の顔立ちに、背中に大きな羽根を畳んでいる。

「お守り、霊力増幅装置、結界等々、万能アイテムね。」

で、その教祖様、松田さんは、最近なの？占いをするようになったのって。それ以前は？」

「それまではぜんぜん。そうですね、ちょうど1ヶ月くらいかな？10月になってからだだったと思いますけど・・・」

実は、里香はそのきっかけになったであろう一つの出来事を知っているのだが・・・

ふうん・・・と芙蓉は考えて、

「キツネにでも憑かれたかしら？」

と言った。

「キツネ・・・ですか？」

さあ？と肩をすくめて、

「正体は分からないけれど、そういうのはたいてい本人の資質より何か霊的なものに憑かれている場合が多いみたい」

「科学的な検証はなしですか？」

芙蓉はコラと指で里香を小突く真似をした。

「でもちよつと心配ね。死を予言するなんて、たちの悪い悪霊に取り憑かれているんじゃないといいけれど」

芙蓉は考え込み、里香は手持ちぶさたに借りた女神像を手のひら

死神はあなたよ！

に転がした。

「あの、これ・・・」

ボタンとドアが開いて里香の母親が飛び込んできた。

「里香！あんた、だいじょうぶ？」

肩を抱き、頭を撫で、怖い顔でどこか異常がないか調べている。

「お母さん、だいじょうぶだよ。あたしはビックリして気絶しただけだから」

「気絶だなんて、あんた」

「だいじょうぶだって」

里香はうるさそうに母親を引き離した。

母親の後ろにまだ若い背広姿の鉄道職員がついてきている。母親は彼を睨んだ。

「いや、あのこちらの方が休ませればだいじょうぶだろうと・・・」

職員に示されて母親は芙蓉を見た。それまで芙蓉も職員と思い込んでいたようだが、

「あら、えっと、あなた・・・」

「芙蓉美貴さん。すごいでしょ、芙蓉さんがわたしを助けてくれたのよ！」

芙蓉は立ち上がって挨拶し、母親も慌てて頭を下げた。

「芙蓉さん・・・。ああ、芙蓉さんね、あらまあ、ほんと、ええ、よくテレビで拝見しております。あらあらまあ」

母親はオホホと笑ってまあまあと頭を下げた。が、里香の目にも母親が芙蓉を胡散臭く思っているのは明らかで、里香はガツカリした。

「お母さん。どうして分かったの？」

これ、と芙蓉が胸ポケットから里香の生徒手帳を取り出した。

「勝手にごめんなさいね。やっぱりご家族にご連絡した方がいいと思っただから職員の方にお見せしました。はい、里香さん」

そういえば自分はまだ命の恩人に名前も名乗っていなかった。里香は名前を呼んで手帳を手渡され、芙蓉に親しみを感じ、嬉しくな

死神はあなたよ！

った。

母親はまたしつこく礼を述べ、里香に歩けるかと促した。

「うん」

里香は立ち上がり、手に持った女神像を芙蓉に差し出した。

「これ・・・」

「ええ」

芙蓉は受け取り、里香にだけ聞こえるように「手帳の中」と囁いた。

「どうもありがとうございました」

母親に促されて廊下に出て、里香はそつと生徒手帳を改めた。

名刺が挟まっていた。

里香は嬉しくてニヤツと笑った。

第3章 警告

登校するとクラスメートたちの様子がおかしかった。問い詰める
と、その女子は実に迷惑そうに言った。

「あんな死神に取り憑かれているんだってさ。近づくと巻き添えに
なるかもって」

里香はカアーツと怒りに赤くなった。

「どういっつもりよ！」

バン！と思いい切り机を叩いてやった。

「お告げだかなんだか知らないけれど、つまらない嘘ばらまかない
ですよ！」

里香は思い切り凄み、机の周りの取り巻きども「信者たち、を威
嚇した。里香はバレー部で毎日練習で大声を上げている。文化系が
多い信者どもに迫力で負けるわけがない。

教祖様「松田麗美は、目を少し潤ませながらきっぱり言い切った。
「嘘なんかじゃありません。あなたは恐ろしい死神に取り憑かれて
います。死が、あなたの運命です。運命に逆らえば、周りの人たち
が巻き添えになって不幸な目に遭うでしょう。あなたが自分の運命
から逃れるのは不可能です。残念ながら」

「あなた、わたしが死ねばいいって言ったんですって？」

里香は麗美のとなりに立つ真衣を睨み付けた。真衣は麗美の後ろ
に隠れるような真似をして「教祖様あゝ」と甘えた声を出した。虫
ずが走る。里香は視線を麗美に戻した。

「言いました。あなたは死の運命から逃れられません。あなたが甘
んじてその運命を受け入れなければ、周りが不幸になるばかりです」
「だからわたしに大人しく死ねって？」

「そうです！・・・」

麗美の目の潤みが大きくなった。一生懸命里香を睨み返してくる。

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

里香は気が抜けた。

「じゃあ教えてくれる？死神ってなんなのよ？なんでわたしがそんなものに取り憑かれなくちゃならないわけ？」

「それは・・・それがあなたの運命なんです」

「だから、ふざけんじやないわよっ！」

再び机をバンと叩いた。

「わたしに死神が取り憑いているって言うならね、それは、あんたよっ！」

指を突きつけた。

「あんたがその力でわたしに呪いを掛けているのよ！ね、教祖様？！」

二人は睨み合った。

麗美はお嬢様だ。

クラスで一番背が低く、色が白く、きゃしゃで、下膨れの雅な平安貴族のような顔をしている。

スポーツ少女の里香とは正反対だ。

こうして二人で睨み合っていると、どう見ても里香が麗美をいじめているようにしか見えない。

「ひつどーい！」

また真衣の奴が素っ頓狂な声をあげた。

「教祖様は見えた運命をお告げになっていただけじゃない。教祖様はお慈悲の心で警告なさってるのよ。教祖様を恨むなんてまったく筋違いよ」

そうよそうよと取り巻きの信者どもが同調する。里香はカツとなつた。

「あんたらもあたしに死ねって言うの！？」

真衣がニヤツと笑って言った。

「死んじやえはあく。みんなのために」

また凄む里香に真衣はキヤツと麗美の影に隠れて言った。

「ね？教祖様、そうですよね？」

死神はあなたよ！

麗美は頷き、使命感溢れる顔で言った。

「あなたは周りの皆にとつて迷惑なんです。皆さん、皆さんも小岩井さんの近くにはいない方がいいです。不幸になります。死にますよ?!」

小岩井さん。みんなのためなんです、死んでください。お願いします」

「な・・・」

麗美は机のへりに両手をついて深々と頭を下げた。
信者たちもならって頭を下げた。

「死んでください。お願いします」

「わたしたちを巻き込まないでください」

「人を不幸にしないでください」

「お願いします」

「な・・・」

何を言ってる？あんなたち、正気!?

お願いします、お願いします、お願いします。

里香は、たじろいだ。

「ちょっとあんたらいいかげんにしなよ！洒落になってないわよ！」

バレー部仲間の池端瑞穂だ。いけはたみずほ 里香を援護するようになり仁王立ちになって腕を組んだ。

「占いなんて馬鹿馬鹿しい。遊びだけにしときな」

真衣が反論した。

「遊びとは何事よ！教祖様の占いは神聖なものよ！」

「その教祖様つてのもやめろよ！むかつくんだよ！」

「無礼なことを言うんじゃないやありません！」

そうよそうよの声に瑞穂の後ろからも声援が飛んだ。

「やめろよ、このサイコ集団！」

死神はあなたよ！

反教祖様派の女子たちが集まってきた。麗美に熱心な信者が付く
のと同様、麗美の占いに反感を持って毛嫌いしている女子も多い。
「おまえら犯罪者だぞ？人に死ねって、許されると思ってるの？」
里香と麗美の対決は、いまやクラスの女子を二分する対立をはっ
きりさせている。男子たちは呆れて周りで傍観している。

「でもでも」

瑞穂の肩の横からひよいと顔を出して小畠望おはたのぞみが言った。背の高さ
で麗美とブービー賞を争うライバルだが、こっちはまるまるとして
黒い。

「麗美ちゃんは人が死ぬのを当てちゃったんでしょう？それってや
っぱすごくなあい？」

反教祖派の女子たちの間でもまあねえと動揺が走る。信者たちは
勝ち誇り、特に真衣！ニヤニヤと見下した笑いを浮かべている。

里香はカチンと来た。

「あたしを助けたのが誰だと思う？芙蓉美貴さんよ」
言ってしまったから里香はしくじったかと思っただが、名前を聞いた瞬間麗美の顔にビクツと驚きが浮かび、里香は得意な気持ちにな
った。

「芙蓉美貴？あの？」

ざわざわと女子たちはささやき合った。

「え〜！芙蓉美貴さまあ〜！？里香ちゃん本当〜？」

望が瑞穂を押しつけて里香にすり寄ってきた。

「ねえねえ、やっぱ美人だったあ？」

「うん。すっごい」

「えーっ、いいなあーっ！！」

それまで傍観を決め込んでいた男子まで好奇心丸出しで寄ってき
て、里香は有頂天になった。

一方真衣は面白くなく黙り込み、麗美もじつと唇をかんでいる。
望が子どもっぽくはしゃいで言った。

「芙蓉美貴様が味方なら死神なんてぜんぜん怖くないね？」

始業5分前の予鈴が鳴り、皆それぞれの席に散りだした。真衣も面白くない顔のまま麗美のそばを離れた。

里香も自分の席に向かおうとすると、麗美が強い調子で言った。

「無理よ！誰にもあなたの死神を祓えはしない！」

麗美は立ち上がり、クラスみんなに警告した。

「皆さん、小岩井さんに近づいてはいけません！みんな、死の運命のとばつちりを受けます！彼女に近づいてはいけません！」

里香はもう腹を立てるより哀れに感じた。若い女の子はみんな飽きっぽい。芙蓉美貴という強烈なスターが現れて、もう教祖様の輝きはかすんでしまっている。

里香は無視し、麗美はクラスメートの冷たい反応を見て、がつくり椅子に座った。

昼休みまで何事もなく過ぎた。

5限目は体育だった。

隣のクラスと合同で、男子は外でサッカー、女子は体育館で跳び箱だった。

前方倒立回転跳び。

助走し、3段の跳び箱に手を付き、勢いで跳び箱上に逆立ちし、さらに勢いで回転し、向こうのマットへ降りる。

中学女子にとってはかなりの大技で、危険であり、だいいち出来ない。

跳び箱の左右に一人ずつ補助が付き、特にテストもなく、体験させるだけのようだ。

「おりゃっ」

スポーツの得意な里香は補助なしで見事成功し、おおー、と皆の称賛を受けた。

先生もパチパチと手を叩いた。

「はい、お見事。でも危険ですからね、他の人はちゃんと補助を受けてやるように」

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

里香は同じグループの友だちにガッツポーズを見せた。
楽しかった。

里香は歓声を上げる他のグループを眺め、ふと、麗美と目が合った。

折れそうにきしゃやな体の麗美はスポーツ全般苦手だ。

彼女はグループの後ろで列から離れて一人ポツンと立っていた。
朝の件で孤立してしまったのはどうやら彼女の方だったようだ。

里香はちよっぴり哀れみを感じると、麗美の方も負けじと深い哀れみの眼差しを投げてきた。里香はまたカッとなったが・・・

突然、

またなんの前触れもなくあの不安感が襲ってきた。

視界が急に白っぽくかすんだように感じ、少女たちの歓声が、床を踏む靴音が、遠くの方からぼんやりワンワンと響いてきた。

体の中が空っぽになり、代わりに冷たく暗い気体が充たした。
肉体的感覚を失い、自分がぼやける。

うずくまろうとした。が、またあの強烈な強迫観念が突き上げてきた。

逃げなくちゃ！

不安が強烈な恐怖に変わっていく。

里香は猛烈な焦りを感じ、キョロキョロした。

逃げ場を捜して。

何から逃げるのか？

分からない。

とにかく、とにかく逃げなくては！・・・

せわしなく動かす視界に麗美が入った。

唇が動いた。

シ・ネ。

嫌だ！死にたくなんかない！逃げるんだ！どこかに、逃げるんだ！
里香は救いを求め、銀の女神を思った。

芙蓉美貴！

ああ、あの銀の女神像！芙蓉は里香に与えてくれるつもりだったんだ。お母さんが邪魔に入らなければ！

ああ、女神様、芙蓉さん、助けて！

ガクンと体が落下する感覚に里香は慌てて力いっぱい床を踏みしめた。

ハツと気配を感じて、望を見た。

今、跳び箱に向かって助走を始めた。

「・・・うう・・・ああ・・・」

里香は老人のようにしゃがれた悲鳴を上げた。

これから何が起こるか、
分かる。

望は勢いを付けて跳び箱のへりに手を付き、体を持ち上げ、手がつると跳び箱からずれ、バランスを崩してあごを叩きつけた。そのまま首を軸に変なかつこうのまま向こうへ回転していき、慌てて支えようとする補助係の手をすり抜け、転倒、背中を角にぶつけて勢いよく向こうに倒れ込んだ。

「キヤーツ！」

悲鳴が上がった。

「小畠さん！だいじょうぶ!？」

先生が駆けてきて望の意識を伺った。体に触れようとしない。里香の位置から、跳び箱の向こうにひくひく痙攣している望の脚だけ

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

が見えた。

「救急車！あなた、保健室の先生呼んで！あなた、教務室に！早く！」

先生の指示でバタバタ生徒たちが走っていく。

里香はジーンと頭がしびれ、実際ひどい耳鳴りがし、夢うつつの状態で、

麗美を見た。

「かわいそうに」

麗美は望を見て言い、里香を見た。

「かわいそうに。またあなたの身代わりで人が不幸になってしまったわ」

麗美の横に真衣が並び、信者たちが集まり、冷たい目で里香を見た。

彼女たちばかりではなかった。その場にいる女子たち全員が、それぞれの意味合いは違うにしろ、里香を恐ろしそうに見ていた。

「死神」

誰かがどこかで言ったが、里香は確認する気も起きなかった。

ただ、

何故？

という疑問だけがぐるぐる心の中を渦巻いていた。

第4章 原因

里香は残りの授業も出席した。周りの視線にいたたまれない気もしたが、望の容態が気になる。じきに救急車がきて隊員に担架で運ばれていったが、その後情報は無い。

結局授業は終わり、さすがに部活に出る気にはならず、瑞穂に欠席の旨、それから、望の様子が分かったら電話してくれるよう頼んで教室を出た。

授業の間じゅう里香はずっと考えていた。

あれは、麗美が、やったことだ。

麗美が、里香か、望に、呪いを掛けたのだ。

断じて自分のせいではない！

・麗美が里香を恨んでいる理由は分かる。

たまたま偶然、

里香は麗美がある男子に「告白」している現場に出くわしてしまった。

麗美は彼にふられ、行きがかり上その様子を盗み見るようになかった。こっぴどくなってしまった。

麗美に気付かれた。

泣いていた。

子どもっぽい子だと里香は麗美を思っていた。麗美は里香をなじむように濡れた瞳で睨み、去っていった。

しばらくして、

麗美がその男子に告白してふられたことがクラスで噂になった。

もちろん里香は誰にも言っていない。

噂の出所は分からなかったが、麗美は里香が発信源だと思ったに違いない。

その後麗美は占いはじめ、やがて信者が付くようになった。

死神はあなたよ！

そういうことだ。

麗美は里香を恨んで呪いを掛けた。
けれど、

「死ね」

とまで思うだろうか？

麗美はお嬢様で意地っ張りなところもあるが、反面あっけらかんと明るい性格だったと思う。特に仲がいいわけではなかったが、以前は普通に会話して笑い合っていた。

「キツネにでも取り憑かれたかしら？」

芙蓉はそう言っていた。

きつとその通りなのだ。

麗美は何か悪いものに取り憑かれ、乗っ取られようとしているのだ！

危ないのは自分じゃない、麗美の方だ！・・・

靴を履き替え外へ向かおうとすると名前を呼ばれた。

「小岩井さん」

振り返り、里香はドキツとした。

クリクリ巻き毛の男子が立っていた。

「林さん・・・ですよね？・・・」

彼は困ったように後ろ頭を掻いた。

はやしあき
のり
林頭。

誰であろう、麗美をふった張本人だ。

頭はもう11月だというのにワイシャツの腕をまくり上げ、

モツサイ、

という形容詞が、里香も意味は解らないが、ぴったり来るような男子だった。

でも噂では同じクラスの女子にはけっこう人気があるようで、・・・

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

顔も・・・ちよつと肉が厚いがまあまあイケてる。

林は頭を掻きながら「ごめんなさい」と頭を下げた。

「いやあ、なんだかよく分からないけれど、迷惑かけちゃってるよ
うで」

「まったくその通りです」

里香は腕を組んでふてくされた顔を作った。この人が麗美の告白を受け入れてさえいれば自分がこんな目に遭うことはなかったのだ。

「いやあごめんね。実は・・・」

里香は人目を気にして林の腕、めくったシャツ、をつかんで玄関の隅に引つ張つていった。

「実は、なんです？」

「うん。実は松田と俺、幼なじみなんだ」

「だから？」

「だからね、あいつの性格はよく知ってるんだ。俺に告白したのはね、どーせ少女マンガかドラマの影響だよ。いわゆる恋に恋して、つてやつだね」

顕も腕を組んで自分の意見にウンウンとうなずいた。

「泣いてたわよ、松田さん」

「困ったもんだ。しばらく失恋の甘美な感傷にひたつたらまたけろつといつも通りに戻ると思っただけどねえ」

里香は顕の冷淡な態度にムツとした。

「だから、本気だったんでしょ？」

「それはない！、と、思うんだけどなあー」

顕はウンと考えて、考えるのをやめた。

「どっちも俺、好きな子がいるから」

あらら。完全にふられたようだ。

「レイは妹みたいなもの・・・心配してるんだ」

顕はキリツと真剣な顔になって、里香はドキツとした。

「最近のあいつ、おかしいだろ？」

「うん・・・」

死神はあなたよ！

「体育の授業のこと、聞いたよ」

「……………」

「君が、標的にされているんだって？」

「……………うん……………」

「ったく、あいつ」

顕は宙の麗美のイメージを睨んだ。その目が不安そうに翳った。

「どうしちゃったんだろうな、あいつ」

「うん……………」

うつむいてしまった里香にちよつと困って、顕は言った。

「小岩井さん、あの芙蓉美貴と連絡できるの？」

「うん。名刺もらったから……………いいんじゃないかな？電話して……………」

「そう！」

顕は晴れ晴れとした顔になった。

「じゃあ相談してみてくれないか？専門家だろ？頼むよ」

「うん。あたしも芙蓉さんに相談したい……………」

「そう、ありがとう！じゃ、何か分かったら連絡してよ。えっと……………」

「……………」

顕はズボンの尻から生徒手帳を取り出し、電話番号を書いて破り、なま暖かい紙を里香に渡した。

「あ、俺ケータイ持ってないから、夜中はNG。10時くらいまでかな？」

顕は屈託なくニコニコ笑い、里香はああこの人は実に正しい家庭の正しい子どもなのだなと思った。

「じゃね。小岩井さんも、気を付けてね」

「うん。ありがと」

顕はさつと手を上げ、早足で戻っていった。

「暑苦しい奴」

里香は渡されたメモをぴらぴらさせて笑った。

門を出て塀沿いに歩き出すと、校舎からけたたましいトランペッ

トの音が鳴り響いた。3階の音楽室。顕だった。吹奏楽部なのだった。玄関からもうあそこに駆け上がっている。窓際の顕に手を振ると、トランペットの音色が高らかに青空を駆け渡った。

その音を、教室の窓を開けて真衣が聴いていた。里香の後ろ姿を視線で追い、見えなくなると、教祖様にご注進に向かった。

N 駅。

ドキドキしながら改札を通った。

・・・だいじょうぶだった。

時刻は4時を回ったところ、ホームはまださほど混雑はしていない。

里香はホームの先を見、目を逸らし、考えないようにした。だいじょうぶ。もう何も起きない。

しかし、

また突然あの不安感に襲われた。

里香は自分を励まし、壁に背を押し付け、じっと耐えた。

なんでもない、なんでもない。

気のせいだ。

きっと、あれとは違う！・・・

しばらく耐えていると、不安が消えていき、里香はほっとした。神経質になっただけだと思った。

ケータイが鳴った。電話だ。

麗美！

「もしもし」

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

『また、殺しましたね？』

「えっ！？」

里香は反射的にホームを見渡した。電車も入ってきていない、何も、異常はない！

「バカ言わないですよ。何も起きてないわよ」

『いいえ。死にました。あなたが、運命に逆らうから、また関係ない無実の人が死んでしまった』

「いいかげんにしなよっ！」

里香は周りに遠慮することなく怒鳴った。

「あんた本格的に頭おかしいんじゃない？」

ふと思った。そうか、今教祖様と信者たちは放課後の教室で占いの真つ最中なのだ。

「呪われてるのはあんたよ！ この、キツネ憑き！」

里香は言葉を叩きつけて一方的に電話を切った。腹が立ってしょうがなかったが、改めてホームを見渡してみた。何もなし。……ほっとした……。……

壁を隔てた表の通りでやかましく自動車のクラクションが鳴っていたが、やがて場内アナウンスがかぶり、続いて侵入してきた電車に乗り、その音は小さくなり、里香の意識から消えた。

第5章 「生追跡！真相を探れ」

水曜夜7時。

Tテレビで2時間のスペシャル番組が放送された。

「生追跡！真相を探れ」

芙蓉美貴の出演する番組だ。

行方不明者や犯罪の容疑者を生放送の情報収集で見つけ出そうという番組だが、今特に注目されているのが芙蓉美貴とその先生の美人霊能力者コンビがその特異な能力で「人」を見つけ出すコーナーだ。

見つけ出す人は、生死を問わない……。

二人は今、長野県某所の森の中に居た。

すでに青いシートが現場を覆い、警察官が大勢立ち働いている。

昼過ぎ、ここで15歳の少女の遺体が見つかったのだ。

里香は帰ってきてからニュースで見た。これで今回の番組も視聴率はうなぎ登りだろう。

少女は、このみ月世間を震撼させている連続猟奇通り魔少女殺人事件の被害が恐れられていた少女だった。

1週間前から行方不明になり、一番新しい被害者と見られる。今のところ……。

紅倉美姫の指摘により警察が現場を調べ、痕跡を発見したことから、土を掘り起こし、少女は発見された。

紅倉美姫、べにくらみき。

それが芙蓉美貴の先生だ。同じミキで紛らわしい。

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

今芙蓉と紅倉は並んで青いシートを見ている。

芙蓉は黒髪、長身、黒のスーツ姿。

紅倉は、銀色の髪をしている。

赤緑色のぶどうの実のような瞳をしている。

真つ白な肌で、目鼻立ちがくつきりして、混血、ロシア辺りとのハーフを思わせる。正確なプロフィールは公表されていない。年齢は23と本人が言っている。

はやばやと白のロングコートを着込み、寒そうに腕を抱いている。紅倉はリポーターの質問に「犯人は連続通り魔事件と同一人物である」と断言した。

スタジオ、司会者。

「これでこの3ヶ月間に5人の同年代の少女たちが同じ犯人に殺害されたことになります。

我々のご両親に依頼を受け、著名な霊能力者である紅倉美姫先生に失踪した少女の捜索をお願いしたわけですが、残念ながら、最悪の結果を迎えてしまいました。

ひと月前の番組でもこの事件を取り上げ、その時は警察OBの方に協力いただいて事件を検証し、番組をごらんの皆さんにも十分な注意を呼びかけましたが、残念ながら、それからひと月で2人の少女がまた犠牲になってしまいました。

紅倉先生」

「はい」

「今回犠牲になった少女、警察の発表では断定されていないのですが、同じ犯人の犯行と見て間違いはないですか？」

「間違いありません」

「そうですね。これだけ注意が促されながらまた犠牲者の出てしまったこの事件、謎がたくさんあるわけですが、先生、今回犠牲となった少女を霊視なさって、犯人については何か分かりましたか？」

「はい。犯人は、分かっています」

死神はあなたよ！

「分かったんですか!？」

「はい」

「それは、すでに具体的に個人が特定できているんでしょうか？」

「はつきりと、分かっていますよ。顔も、名前も、住所も」

「そ、それではそれをここで発表していただけるでしょうか？」

「いいえ。ここで言うてしまつては、後々困つたことになるでしょう?」

スタジオゲスト（霊能力に対し否定的）

「ほんとに分かつてんの？」

「ええ。警察にはすでにいくつか具体的なヒントを提出しています。名前は教えていませんが、日本の警察は優秀です、方向さえ絞り込めれば、もうすでにかなり狭い範囲で具体的な証拠を固めつつあるはずです。犯人は、必ず、この一両日中に逮捕されます」

キッチンで夕食の後片づけをしていた母がやってきた。

「あらこの人。ふうくん、本当かしらねえー？」

「うるさいなー」

父親が風呂から上がる音がした。

「ほら、お母さん、どうぞ、お風呂お先に〜」

「ありがとよ。でも怖いわねえ。あんたも、気を付けんのよ」

「だいじょうぶだよー。事件はぜんぶ田舎だもん」

里香は母親を追い払い、テレビに集中した。

スタジオ、アナウンサー。

「犯人逮捕はけっこうなのですが、どうでしょう、当たり障りのない範囲で犯人像を今ひとつ明らかにしてはいただけませんか？」

「犯人は男性、40代前半、独身、ちよつと太り気味で、メガネをかけています。」

電車マニア

犯行は関東から中部、東北と、広範囲に渡っていますが、犯人は

死神はあなたよ！

移動に鉄道を利用しています」

「ちよつと待つてください。それは大きなヒントですよ。しかし、犯人はそんな山奥に遺体を運んでいるわけで、それは、自動車を使わないわけにはいかないでしょう？」

芙蓉がちよつと紅倉を心配する。

「そうですね。犯人はレンタカーは使っていません。では、どんな車を使ったか？」

スタジオ、女性タレント

「タクシー……ですかあ？」

紅倉、困る。

「えっと……それはさすがにありませんね。犯人は車を使って、しかもその車を現地調達しています。でもその車は見つかっていませんね？ どうしてでしょう？」

「どうしてなんででしょう？」

「使った後、ちゃんと元あったところに返しておくからです」

スタジオ、ちよつと呆気にとられて、ゲストの警察関係者は渋い顔をする。

「え？すると……盗難車、なわけですか？ 犯人はその盗難車を使った後、元に返しておいた？」

「そうです。持ち主はまさか自分の車が犯罪に利用され、遺体を運んだなんて思わないでしょう？」

「すると、そういうことの出来る人間、プロの自動車泥棒が犯人ですか？」

「または鍵屋か自動車整備工……。あら、ちよつと喋りすぎてしまいましたね。失敗しました」

紅倉は指をビシツとカメラ……。ではなく收音マイクを持つADに向け、芙蓉にカメラに向け直され、テレビを見ているであろう犯人に向けて宣言した。

「分かったでしょう？ あなたはもう逃げられませんよ。あなたは罪

死神はあなたよ！

もない少女たちを殺めた報いを受けるのです。覚悟しておきなさい」

・・・紅倉はちよつと呆けたところがある。それもいたしかたなく、不思議な色をした瞳はほとんど物が見えない。

代わりに、

別のものが見える、

らしい・・・。

番組が終わり、9時になった。

里香は迷っていた。

芙蓉にもらった名刺を鼻の前でヒラヒラさせた。バラの香りが漂う。

ケータイの番号が手書きで記してある。よほど特別の人にしか知らせないのだろう。

電話をしたい。話を聞いてもらいたい。この胸のモヤモヤをぶちまけ、スッキリさせたい。

瑞穂から連絡はなかった。気になるが、電話をするのも怖い。

まさか望が死んだら・・・、そうしたら連絡網が回ってくるだろう。

きつと、だいじょうぶだったの・・・だ・ろ・う・・・・。

芙蓉に電話をして、もし望のケガが自分のせいだと言われたら・・・、

立ち直れる自信がない。

芙蓉は今長野だ。

里香はさんざん迷って・・・、けっきょく電話はしなかった。

夜中。

里香は何か悪夢を見て目を覚ました。

胸がドキドキ鳴って、全身がじっとり汗ばんでいる。

枕元の時計を見ると2時だった。

・・丑三つ時。

のどが渴いたと思って体を動かそうとすると、動かなかつた。
金縛り。

暗闇に目が慣れてざらざらした視界の中に部屋の様子が浮かび上がった。

胸がドキドキ鳴り、呼吸がヒツヒツと乱れる。

・・・・・部屋の隅に誰かいた。

二人。

ガサリと動いて里香に向かって歩いてきた。

ガサ、ガサ、ガサ。

里香は息を飲み、恐怖で涙が溢れた。

ガサ、ガサ。

不自然にギクシャクした動きをする二人は、二人とも、形が崩れていた。

人間の形が、壊れていた。

いいいいいいいいい・・・い・・・

二人は呻いて、里香に手を伸ばしてきた。

一人は女。

一人は男、老人。

「いいいいい、ひひひ・・、ししし・・・」

壊れたあごで必死に何か言おうとする。

「しししし・・死にたく・・なか・・った・・」

老人が折れた脚で体を支えきれず、ドサツと里香の上に倒れ込んできた。ひいつ。

「死にたく・・なかつた・・」

老人は悔しそうに顔を歪めると里香の顔を触ってきた。ぬるっとした感触。里香はもう恐怖で精神が硬直しきっていた。

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

無様な老人を見下ろして、女は、笑った。
「けらけらけらけらけら。」

「死ね、死ね、死ね。みんな死んじゃえ」
「けらけらけらけらけら。」

女は、笑うたび顔がいびつにずれた。
黒髪。

電車の、あの女だ、と里香は思った。

「あんたも、死になさい」

「恐ろしい顔で里香を睨んだかと思うと、グシャン、と潰れて、崩れ落ちた。」

「けらけらけらけら、けらけらけらけら。」

調子の狂った笑い声だけがベッドの下から聞こえてくる。

「死にたくなかった、死にたくなかった」

泣きながら恨めしそうにしつこく顔を触ってくる老人に、里香は猛烈に突き飛ばしたい衝動に駆られた。

「あんたなんか、知らない！」

老人の動きが止まり、ゴロンと転がって、落ちた。

「恨むぞ・・・あんたを、恨むぞお・・・」

知らない知らない知らない！あんたなんか知らない！

狂った笑いとしつこい恨み節。里香は大声を上げて耳を塞ぎたかった。

！

.....

布団の中に、何かいた。

冷たい感触が里香の太ももから腹に這い上がり、それは確かな感触をもつて、胸に這い上がり、頭をもたげた。

「.....」

少女だった。自分と同じくらいの年齢の。

死神はあなたよ！

黒く汚れた顔に、大きく開いた目の白目だけが異様に白く感じられた。

少女は間近にじっと里香を見つめ、ギュッと結んでいた口を開いた。

ドツと、

生臭い黒い血が溢れた。

「きゃああああああっ！！！！！！」

里香は大声で悲鳴を上げてベッドの上に飛び起きた。

頭を抱えて喚き続け、喚き続け、やがて驚いた両親が駆けつけた。

「里香、おい里香！しっかりしろ」

父親に強く肩を揺すぶられ、母親に頭を撫でられて、里香はヒックヒックとしゃくり上げた。

「お父さん・・・お母さん・・・うう・・・もう・・・いやあああ・・・」
明るい電灯。どっと温かい安心感が流れ込み、パニックは収まった。しかし恐怖は去らない。

電話が鳴った。

「こんな夜中にいったい誰だ？」

父親は怒りながらダイニングに向かった。

じきにいぶかしそうな顔で父親は受話器を持って戻ってきた。

「おまえにだ」

受け取り、里香は受話器を耳に当てた。

「もしもし・・・」

『芙蓉です』

里香はパアツと明るい光が差す思いがした。

「芙蓉さん！」

『~~~~~』

芙蓉は里香の耳に何やら聞いたことのない言語の呪文を唱えた。

呪文は里香の耳の奥から脳髄に侵入していく。

死神はあなたよ！

『……これで今夜はもうだいじょうぶでしょう』

「芙蓉さん！」

『明日、時間を見て会いに行きます。先生もいっしょですから、どうぞ安心してください』

「先生……紅倉先生も!？」

『ええ。ですから安心してお休みなさい』

里香の胸に強い希望がいだかれた。

第6章 異変

翌日。

里香は休むよう勧める母親を振りきって登校した。

電車に乗るのは怖かった。

ずっと誰かに見られているような気がした。

教室にはいると、まっすぐ麗美の机に向かった。

「あんた・・・、いたいなんなのよっ!!!」

思い切り怒鳴りつけ、睨み付けた。入室するなり冷ややかな目で冷笑していた信者どもがビビって硬直した。

麗美も挑戦的な強い視線で里香を見つめて答えた。

「昨夜、ずいぶん恐い目にあつたようね？」

里香はカァーツと頭の芯が燃えた。

「やつぱり・・・、やつぱりあんたがやってんだっ！」

このっ、魔女!!!」

麗美はヒクリと眉をゆがめ、携帯電話を取り出すとニュースサイトから一つの記事を拾い上げた。里香に差し出す。

里香は、ギョツとなった。

それはN駅の外の車道で、横断していた85歳の老人が走ってきた車にはねられて死亡したという記事だった。

あの、

「死にたくなかった・・・」

老人・・・。

麗美が見下す目で言った。

「ね、分かったでしょう？あなたは死ななくてはいけない。でない
とどンドン巻き添えで人が死んでいく」

「・・・」

里香は何も言えない。

「あなたが、みんなの死神なのよ!」

死神はあなたよ!

里香は、思わずパチンと麗美の頬を張った。

「あ・・・」

里香は自分の思わぬ行動にひるんだが、すぐに攻撃的な瞳に戻った。

悪いのは自分じゃない、この、魔女だ！

魔女、麗美は、頬を抑え、じいーっと、恨めしそうな目で里香を睨んだ。

里香は再び腹の底から激烈な怒りがこみ上げてきて左手を伸ばすとグツと麗美の頭を鷲掴みにした。丸い頭を搔き、細く艶やかな髪の毛をひっ掴んだ。

麗美の目が吊り上がり、顔面が硬直した。

里香は怒りに燃える目で睨んだ。

右手が・・・何をやる！？

「おい、里香。何やってんだよ！？」

後ろから瑞穂が里香の両腕を掴んだ。

里香は太い息を吐いて自制した。髪の毛を放す。

「死神」

「魔女」

里香はプイと横を向くと瑞穂を引っ張って離れた。

「望はどうなの？容態は分からないの？」

「それが・・・」

瑞穂は言いづらそうに言った。

「意識も戻って、まあだいじょうぶだろうって」

「じゃあどうして連絡してくれなかったの！？」

「あなたには連絡するなって、怖いからって、望が・・・」

里香は自分の席に着き、じっと前を見据えた。

今は耐えるんだ。

芙蓉さんが、紅倉先生が！

じきに何もかも解決してくれる！・・・

首をガクガク振るわせ、何か内からこみ上げてくるものにひどく苛立っている。

「うっ……うっ……」

麗美は四つ足で机の間を徘徊し始めた。顔をガクガク振り立て、涎を飛び散らせた。

みな逃げた。

里香は、分かっている。

そっと立ち上がるうとしたが、腰を浮かしかけたところで麗美と目が合った。

「……………」

黄色く血走った目。

里香は戦慄した。

「ガウツ！」

麗美は吠えて里香に躍りかかった。

「きゃっ」

「ガウガウツ、ガルルルル」

里香にのしかかり、口を大きく開けて黄色く尖った歯で里香の首筋目がけて噛みついてくる。熱い息が里香の顔に吹き付けられ、飛び散った涎が里香の顔やブレザーのえりを汚した。

「やだ、放して！」

麗美は両手で里香の肩をガッチリ掴み、執拗に噛みついてきた。ものすごい力だった。

小柄な麗美には考えられない剛力だった。

「ガルルルル」

「たすけてーっ……！」

里香の悲鳴にようやく我に返った教師が男子たちに指示して取り押さえさせようとした。

2人の男子がおずおず手を出した。

ガブツ。

「ぎゃっ」

死神はあなたよ！

一人が噛みつかれた手を押さえた。血が滴り、女子たちが悲鳴を上げた。

「押さえる！押さえる！」

本気になった男子たちが麗美の腕を押さえ、噛みつくこととする顔を押さえて引き離そうとした。

ゴンツと麗美のげんこつが一人の顔をまともに殴った。彼は鼻血をしたたらせて後ろに下がった。

「押さえる、放すな！」

「なにごとですかあっ!？」

となりの教室で授業をしていた別の男子教諭もやってきて、さんざん大暴れした末、ようやく麗美は床に大の字で押さえつけられた。「フー、フー、ガウ、ガウガウガウツ！」

床の上でまだ麗美は抵抗した。ブラウスのボタンが吹っ飛び、白いブラが覗いていた。

暴れていた麗美は、やがて力尽きたのか、急激に大人しくなった。しかし半開きの口から泡を吹き、やたらと長い真っ赤な舌をはみ出させ、とてもまともな状態ではない。

里香も椅子から床に転げ落ち、膝を抱えてガタガタ震えていた。

大乱闘が収束し、教室はしーんと静まり返っている。

里香はふと、自分を見るクラスメートたちの目に気付いた。

みな、恐怖に怯えきっていた。

里香が振り向き立ち上がろうとすると、一人の女子がガタンと椅子に足を取られてひっくり返った。

廊下にも、騒ぎに集まってきた他のクラスの生徒たちが、恐怖の眼で里香を見つめていた。

ひくひく痙攣する麗美。

冷たい恐怖の視線。

里香はまた絶望的な気分突き落とされた。

やっぱり自分が・・・

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

「死神」

誰かが言った。

真衣だ。

敵意を露わにし、反面、恐れて体を斜めに反らしている。

「小岩井さんに関わると、みんな、殺されちゃうのよおっ！」

教師が叱った。しかし、

「死神、死神、死神」

と、

小さく、重い合唱が、クラス中に充滿した。

里香は立ち上がった。

「死神、死神、死神」

死神。その言葉がぐるぐる頭の中を駆けめぐり、めまいがした。体が渦に翻弄される。

突然、

またあの不安感が襲ってきた。

絶望的に。

強迫観念が。

もう一刻の猶予もない。

逃げる、逃げる、逃げる！

「キヤーツ！」

「キヤーツ！」

「キヤーツ！」

女子たちがいつせいに悲鳴を上げ、頭を抱え、振りたくった。

教師たちが落ち着くように怒鳴るが、悲鳴は収まらない。

ここ、2年3組の教室は2階にある。

狂乱した女子たち、4人が、いつせいに窓に向かって走り出した。本能的に危険を察知した男性教師が一人を捕まえた。女子生徒は

死神はあなたよ！

髪を振り乱して悲鳴を上げ続けた。

残る3人は窓を開いた。

へりに足をかけ、よじ登った。

「危ない！」

キヤーツと悲鳴を上げて、3人はそこから飛び降りようとした。

と、その動きがピタリと止まった。

里香は、窓から眩しい銀色の光が差しているように感じた。

悲鳴を上げていた他の女子生徒たちもすつと黙った。我に返り、ポカンとしている。

里香は窓に歩み寄り、窓枠にしがみついている女子をこちらに降ろさせ、外を見た。

芙蓉美貴だった。

相変わらず黒のスーツ姿で、右手に何か掲げている。

銀の女神像だった。

目を反射してキラッと光ったが、女神像自身からも白く眩しい光が溢れているように里香は感じた。

芙蓉は手を下ろし、ニコツと笑った。

「もうだいじょうぶよ」

第7章 正体その1

芙蓉の指示で麗美は校長室に運ばれた。里香もいつしよに来るよ
うに言われ付いていった。

校長室には校長と、真つ白な女性、紅倉美姫が待っていた。

校長は困惑した顔をしていたが、何も言わなかった。生徒がこんな状態になって医者も呼ばず、こんな怪しげな霊能力者を招き入れるなど、ふつうあり得ないように思うが、事前に何か言われていたのだろう。紅倉にはいろんな機関にいろんなコネクションがあるよ
うだから。

校長室に入る前、芙蓉から皆にきつくお達しがあった。

「絶対に、紅倉先生に失礼のないように！」

実はよほど気むずかしく気位の高い人なのかと思ったら、ドアを開くなりその理由が分かった。

ものすごくきついバラの匂いが吹き付けてきた。

香水のビンを丸ごと振りかけたようだ。

応接用のソファに麗美を寝かせると、里香と担任以外はさっさと
追り返された。

その際、

「えーと、その男の子、ハヤシアキラ君？呼んでくれるかしら？」

細いビブラートののかかった声で紅倉に言われ、体育会系の男性教師は柄にもなく赤くなって「ハイ」と答えた。

「さて、と」

見つめられて里香はものすごく緊張したが、紅倉は思いがけない親しみのある笑顔を見せてくれた。

「たいへんでしたわねえ。とんだ災難でした」

里香は心底ほっとした。まだ何も解決したわけではないが、この人に任せれば絶対にだいじょうぶという安心感があった。

芙蓉美貴はキリリとしたトップモデルの健康的な美貌を誇ってい

死神はあなたよ！

るが、

紅倉美姫は、明らかに特殊な類の美貌だ。

表情はとても柔らかで芙蓉よりずっと幼く見えるが、やはり欧州ハーフの彫りの深さと、やはりその特殊な目の色が、異質さを感じさせる。

深い森の湖に住む妖精か、

はたまた美しい悪魔の化身か。

いずれこの日本の都会の中学校にはありうべからざる存在だ。

ノックがして、林頭がやってきた。

頭は紅倉と芙蓉を見て驚き、麗美を見てギョツとした。

「レイ！ だいじょうぶなんですか？」

ソファに寝かされた麗美は胸の上に両手を組み、そこに例の女神像を握らされて、大人しく目を閉じている。

紅倉は「ふうん」と鼻にかかった声を出して小首を傾げた。テレビでもよく見せるポーズだ。

「それでは解説を始めましょうか。

松田麗美さんのこの状態ですが、

これはやはり、キツネ憑きですね」

里香は芙蓉を見た。芙蓉は軽く肩をすくめた。当てずっぽうが当たっていたらしい。しかし霊能力者の勘は、ただの勘ではない。

「頭さん。ご近所に稲荷神社はありません？」

頭は頷いた。

「あります。子どもの頃近所の友だちといっしょによく境内で遊んでいました。レイもいっしょに・・・」

「なるほど、子どもの頃の思い出の場所ですね。

麗美さんはあなたにふられた後そこに泣きに行ったのですね」

頭はドキツとし、里香にちよっぴり非難を含んだ視線を向けた。

里香は慌てて首を振った。

紅倉は、何も聞かずともすべて見えているのだ。

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

「そこで子どもの頃から彼女を見守っていたおキツネ様が彼女を慰めようと力を貸したのですね」

キツネに取り憑かれた麗美はピクリとも動かず、聞き耳を立てているようにも見える。

「最初の頃の占いは他愛のないものでした。テストの山だとか、誰と誰が好き合っているとか、落とし物の在りかだとか」

紅倉に里香は頷いた。

「ところが、それがどんどんエスカレートして過激な方向に向かいだした。

きっかけは、自転車の事故ですか？」

里香は頷いた。ある1年生の女子が自転車に「ひき逃げ」されて怪我をしたのだ。

「麗美さんはその犯人の高校生に、きつと天罰が下る、と予言した。そして、その高校生は予言通り交通事故に遭って危うく死にかけひき逃げの件もばれてしまった。

それが知れると麗美さんの占いは一気に『信仰』を集めるようになった。

それから、占いはどんどん過激な内容になっていきましたね？」
そうだ。

「人の病気やケガの不幸、恋占いも意中の相手を射止めるため邪魔なライバルを嫌われるように仕向けるとか、・・・占いというよりもはや呪いですね」

麗美の体がビクツと動いた。

里香は麗美を攻撃するように言った。

「そうです。だから彼女の信者たちは教祖様なんておだてて、自分の望みを叶えるために利用しようとしたり、そんなあり方を非難するクラスメートには『天罰』が下るようにそそのかしたり、誰も彼女に逆らえないようにしたんです」

「と言ったって、実際そんなにひどい目にあつた人はいましたか？」

「・・・いえ・・・」

死神はあなたよ！

たしかに、病気やケガはあった。つき合っている男女が不仲になった噂もあった。でも、言われてみれば、みな、どうってことはない……

「そう、大した『天罰』ではありません。

では、どうしてそんな大げさに恐れたり、称えたり、したのでしようねえ？」

どうしてだろう？

「遊びだったんじゃないやありません？」

「え？」

不意をつかれたように里香は紅倉を見た。

「占いごっこ、教祖様ごっこ。女の子はそういう遊びが好きでしょう？賞賛するのも、否定するのも。もともとそんなムキになるほどのものでもないのにな？」

すぐに『自分たちの』グループを作りたがる」

紅倉の浮かべた薄笑いに里香までゾツとした。

「でも、

その遊びに一番熱心で一生懸命もり立てていたのは、

誰でしょう？」

「だれ……！！」

紅倉は指を立て、しっ、と言うポーズを取った。

「その誰かさんが中心になって教祖様をもり立て、クラスの女子みんなを巻き込んでこの遊びを盛り上げていった。

彼女にとってもそれは遊びだったのでしょうか……、そもそもの動機はなんだったのでしょうか？」

声には出さない。でも、それは、

真衣、

野辺山真衣だ！

「顕さん」

「はい？」

「麗美さんは本当のところ本気であなたに恋していたのでしょうか

「？」

顕は考え、答えた。

「違つと思いますよ。あいつはまだ子どもなんですよ。たぶん今は頼りがいのあるお兄ちゃん的な男子に惹かれるんじゃないかと思うけれど・・・、たぶんそれは今だけです。きっと、レイの本当の好みはぜんぜん違つています」

男子に女子のことがどれだけ解つているのか分からないが、顕には幼い頃からの長い付き合いで麗美という女の子のことがだいぶ本質的なところまで分かっているのだろう。

紅倉は頷き、続ける。

「わたしもそう思います。もうしばらくすれば彼女はガラリーと別の女性になると思いますよ」

そこで何故か紅倉はおかしそうに笑つて麗美を見た。コホンと咳をして、

「では、そんな麗美さんがどうして顕さんに告白したんでしょう？何かの影響が考えられますが、影響を与えたのは、彼女と熱心にお付き合いしていた女友達でしょう。

その女友達にそれとなく勧められて、麗美さんはすっかり幼なじみの顕さんに恋をしていると思ひ込んでしまった。そして告白に至るわけですが、

思つんですけど、

本当に顕さんが好きだったのは、実は、その女友達の方だったんじゃないありません？」

・・・。。そうかもしれない。

麗美はもともと大人しく、誰にとつても「友だちの一人」という地味な存在だった。

一方の真衣はもともと八方美人で外交家だった。

あまりしつくりくる組み合わせではない。

真衣がやたら麗美と仲良くしていたのは、麗美の仲良しの顕に気があつてのことだったかもしれない。

死神はあなたよ！

真衣の麗美に対する友情が本物であったかは、その後の展開を考えるととはなはだ疑問だ。

「では」

紅倉が意地悪く目を細めて言う。

「麗美さんの顕さんへの告白をあらかじめ知っていて、どこからかこっそり見ていたのかも知れませんかね」

真衣だったのか！噂を流したのは！

紅倉は悪魔的な薄笑いを浮かべる。

「こついうのをイジメって言うんじゃないかしら？」

いじめていたのは、その女友達。

いじめられていたのは、麗美さん」

麗美の体がまたビクリと動いた。

「あんまりかわいくないでしょ、その子」

問われて里香は困った。答えづらい。

紅倉は笑った。この人は、実はやはりかなりきつい性格をしている。

「自信がなかったんでしょうね、自分が告白する。だから身の程知らずにも、告白して、ふられた、麗美さんが小憎らしくて、バカにしてやりたい気持ちになったのでしょう。」

教祖様なんて持ち上げておいて、内心ではバカにして嘲笑っていたんです」

麗美の体がビクリと動き、目を開くとカーーツと紅倉に歯を剥いた。

「うそだ」

男のように野太い声で不明瞭な発音で言った。

「嘘なもんですか。あなた、神様のくせにぜんぜん女心が分かっていないのねえー」

麗美は歯を剥き、暴れた。

しかし、胸に杭を打たれたドラキュラみたいに銀の女神像は胸の上でピタリと静止し、脚を縄でグルグル巻きにされたように動けな

い。

紅倉は笑って見ている。

「麗美さんはその女友達に乗せられて里香さんにあんな『予言』をしてしまった」

麗美はますます暴れ、荒れた。

「ちがう。うそだ！」

「はいはい、ごめんなさい。そうですね、神様であるあなたが呪いなんか手を出さずわけないですね。あなたはもともと麗美さんを慰めるために占いにちよつと力を貸してあげただけ。自転車の高校生にはそれこそ神様として天罰を与えただけ。里香さんのこととは、なんの関係もありません。」

ああ、一つ、ありましたね？」

紅倉がじつと麗美を、いや、麗美に取り憑いたキツネを見た。

キツネは、黙った。

紅倉はキツネを神様と呼ぶ。実際、危険運転の高校生に天罰を与えるほどの力をこのキツネは持っている。

その神様を、紅倉は一睨みで黙らせた。

紅倉の瞳は赤紫色に光っている。白目は血走り、ピンクに濡れている。

そして、しばらく前から里香は感じていた。

生臭い臭気。

それを里香は知っていた。

悪夢の中で少女の口から吐きかけられた腐った血の生臭さ……

それは、死の臭いだった。

紅倉はキツネに言う。

「望さんのことはやり過ぎでしたね。やり過ぎというか、想定外でことかしら？」

あれはむしろあなたが麗美さんにこれ以上深入りしないように警告する意味でしたちよつとした悪戯でした。不幸だったのは、望さ

死神はあなたよ！

んはあなたが思った以上に運動音痴だったことです」

キツネはじつと聞いている。

「あの事故はあなたのせいです」

キツネは目をしばたたかせ、

『その通りである。申し訳ないことをした』

と謝った。

「もう、自制できますね？」

『ウム』

芙蓉に銀の女神像を取ってもらい、麗美はむっくり起き上がるとあぐらをかいた。

紅倉は表情をゆるめ、幾分死の臭いが薄れた。代わりにものすごいバラの匂い。

「最初の駅での事故の予言、あれは純粹に里香さんの危険を察知しての警告でしたね？」

『そうだ』

麗美のキツネは里香を心配そうに見て言った。

『その者にはとてつもなく悪い卦が見えておる。それは、わしにも、誰にもどうにもできぬ。おぬしにもじゃ』

威厳を取り戻した厳しい顔に睨まれて紅倉はさあ？と肩をすくめた。

里香はひどく不安になった。

紅倉が続ける。

「占いによるただの警告だったのが、一部の熱心な信者の過激な問いかけによってそれは『死の予言』になってしまった」

里香は疑問を言う。

「でも、わたしが死ななかつたせいで、別の人死んだんじゃ・・・」

「占われたのは結果だけです。その結果を勝手な思い込みで自己流に解釈したのが、予言です」

「はあ・・・」

紅倉は続ける。

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

「しかし、

予言が当たった。麗美さんは本心ではすごく怖くなっていた。望さんが大怪我をした。

あなたは警告のつもりだったでしょうけれど、麗美さんはまったく別の意味に取った。

また駅の外の事故の予言が当たった。

麗美さんは確信した。

里香さんは死神だ。

彼女が死ななければ、

被害はどんどん拡大する。

警告は無視された。

自分が、

なんとかしなければ、

と」

キツネは険しい顔で黙り込んだ。

「あなたも焦りがありました。あなたも、麗美さんのためになんとかしなければと思った。で、さっさと離れればいいものを、

力を、

死神里香さんを退治する強力な力を求める麗美さんに、

取り込まれてしまった」

一生の不覚、と、キツネはうなだれた。

「21グラム」

突然紅倉は言い、皆、は？と首を傾げた。

「人間は死ぬと21グラム体重が減るのだそうです。

つまり、21グラムが人間の魂の重さですね？」

芙蓉は笑っている。この講義はすでに聴いている。

「重さがある以上、魂とはこの世の『物質』です。

でも、

21グラムと言えばお水21CC。

果たしてこれは人間の魂の質量として大きいんでしょうか？小さ

いんでしょうか？」

さっぱり分からない。

せんせ、と芙蓉にたしなめられて紅倉は肩をすくめた。

「結論を言えば、

魂とは、

人間で言う21グラムの物質に載った、

記録データのことです」

.....。

「しかしながら、霊の力というのは本質である個人データより、載っている媒体物質の質に大いに関係があり、徳の高い魂は金や銀や紫色に美しく輝いています」

芙蓉に「んっん」と咳払いされて紅倉は舌を出した。

「今、おキツネ様の魂は魂を形作る物質を麗美さんの魂に取り込まれる形になっています。おキツネ様も自分の魂を奪われてはたいへんなので、結局二人で魂を共有しているかっこうになっています。ところが、

そもそもそれぞれの生き物にはその種特有の魂の形があるのです。同じプログラムでもOSのバージョンが違えば正常に機能しないのと同じです」

よね？と芙蓉に訊いて、機械音痴のくせに偉そうなこと言っんじやありません、と叱られた。

「と言うわけで、麗美さんはおキツネ様の魂を取り込んだものの、いかに神格化しようとしよせん動物の魂が人間と同調することは滅多になく、両者のシンクロは上手くいかず、魂の低い部分、動物的な先祖帰りのレベルで肉体的に発動してしまい、あのようなみつももないことになってしまったのです。ね？」

訊かれておキツネ様は『面目ない』と赤くなった。

里香は訊いた。

「今はどうなっているんです？」

「わたしがちょっといじっておキツネ様のレベルに調節しました。

麗美さんの魂は冬眠状態です」

「じゃあ、今の会話は聞いてないんだ」

ほっとしたが、

「いえ。脳には記録が残りますから、夢の中のような記憶はありますね」

「そうですか・・・」

ちよつとかわいそうだ。

「魂と肉体がセットで『その人』なんです」

紅倉はおキツネ様を見た。

「事態は掴めました。お社にお帰り願えますか？麗美さんも落ち着いていきますから、今ならすんなり抜けられるはずですよ」

『任せて良いのかな？』

「はい」

おキツネ様は里香を見て、ため息をついた。顔を上げ、

『抜けるぞ』

目を閉じ、ふらりと麗美の体が揺れた。芙蓉が抱き留め、ゆっくり寝かせる。

おキツネ様の魂が見えた。

黄金色に輝いている。

名残惜しそうに麗美の上をクルリと一周して、

『後始末は頼んだゾよ』

尾を引いて、ふうつと、消えた。

第8章 正体その2

「さて」

紅倉は里香に向いた。

「言ったとおりあなたのことは麗美さんともおキツネ様とも関係ありません」

「じゃあ・・・」

それじゃあやっぱり、わたしが死神と云うことじゃないか!?!? . . .

紅倉は柔らかく笑った。

「あなたは靈感が強いのです。」

一度、死を予言したことがあったでしょう?」

あつと里香は思い出した。

「おばあちゃん・・・。わたしが7歳の時、おばあちゃんが死ぬ前にわたしを訪ねてきたんです。わたしがおばあちゃんがさよならだつてと泣いていたら、病院から危篤の連絡があったんです・・・」

紅倉は頷いた。

「順序が逆なんです。」

あの女性は日頃から悩みがあつて、あの時はひどく不安定な状態だった。多額の借金があつて、悪質な取り立てに悩んでいたんです。帰りたくない。どこかに逃げてしまいたい。電車が入ってきて、あの人は、逃げた。悩みから、この世から、人生から」

逃げた・・・。

どこかに逃げなくては・・・、

それはつまり・・・、

「あなたはその女性の不安に同調して、未来を、予知してしまつたんです」

死神はあなたよ!

「あの不安、強迫観念は、あの女性のものだったのか!?!?」
「体育の時間の望さんの場合。」

あなたはおキツネ様と違って望さんの運動音痴をよく知っていた。

だから、ああなることが分かってしまった」
なるほど。でも・・

「わたし、あの時もやっぱり同じように感じたんです。やっぱり、逃げなきゃ、って」

「ふうん」

紅倉は小首を傾げ、

「それはまた別の原因ね。」

あなたは望さんが麗美さんの呪いで殺されると思った。その死のイメージがそういう反応を引き起こしたんです」

「はあ・・」

今ひとつ釈然としないが。

「そして再び駅。表の車道の事故。」

老人が歩いていたのは横断歩道ではありませんでした。早く向こうに渡りたくて、何の気なしに車道を渡り始めてしまった。

自動車が走ってきた。クラクションが鳴らされる。

老人は思った、

逃げなきゃ。

「そう、逃げなきゃ」

紅倉は笑った。

「そういうことです。」

順番が、逆なんです。

あなたはただ、人の死を、敏感に感じ取って、予知してしまっただけなんです」

紅倉は里香が聞きたかった言葉を言ってくれた。

「あなたは、死神なんかじゃありません」

里香は芙蓉を見た。芙蓉は優しく笑ってくれた。里香も嬉しくて笑って、涙ぐんでしまった。

死神はあなたよ！

しかし、すぐに不安がもたげる。

「でも、じゃあ、教室のことは？・・・」

あれは・・・、

「集団ヒステリー」

紅倉はいとも明瞭に答えた。

「下地は十分出来ていました。」

麗美さんを教祖様とする教団。

恐ろしい予言。

死。

クラスメートの悲惨なケガ。

とどめにあがめたてまつる教祖様の異様な醜態。

思い込みが思い込みを呼び、

死神、死神、死神、・・・。

「異常な興奮状態を作り出し、ついに爆発した」

「でも・・・」

「中世の魔女裁判に実例があります。なんでもかんでも心霊現象に結びつけてはいけません。それは、

人を不幸にします」

紅倉の冷ややかな目に見すくめられ、

「はい・・・」

里香は頷いた。叱られた気分だ。

紅倉はため息をついて気が進まぬように言った。

「納得できていませんね。では、あなたが聞きたくない、本当のところを明かしましょう」

紅倉の赤い瞳に覗き込まれ、里香は緊張にゴクリとツバを飲んだ。

「死の予知が、

あなたの不幸な前世の記憶を甦らせてしまったのです」

「前世の・・・記憶？・・・」

紅倉は重く頷く。

「そうです。」

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

あなたは前世で、
殺されています。

ちようど、

今の年齢で」

ゾクリと戦慄が走り、怖いイメージが浮かんだ。

「あ・・・」

思わず足がすくんだ。

布団の中に這い上がってきた少女。

黒く汚れて・・・、

里香はめまいがした。

芙蓉が支えてくれた。

紅倉は哀れみの目で言う。

「彼女・・・前世のあなたは、暗い地下室・・・お酒の貯蔵庫のよう
なところに数日間監禁された後、殺されました」

芙蓉にソファに腰掛けさせられる。

「その男はあなたの他にも何人もの少女を殺しています。楽しんで
殺していたのです。あなたは、暗い密閉された空間で、さんざん怖
がらされた挙げ句、無惨にも殺されたのです」

ああ、分かる。イメージが、頭の中に・・・

逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ！！！！！！

「それが」

紅倉が歩いてきて里香の額に触れた。

途端に頭の中から一切のイメージがかき消えた。

「あなたの不安と強迫観念の正体です。

もう、終わったことです。

あなたの、生まれてくる、前の、

本来決して思いつくはずのない記憶なのです」

紅倉はニツコリ笑った。

「終わりです。もう怖がる必要はありません」

第8章 正体その2（後書き）

次回、最終回。

死神はあなたよ！

最終章 黒い影

里香は午後の授業を終え、帰宅の途に付いた。

部活はまた休むが、気分は晴れやかだった。

明日からは、元通りだ。

駅のホームに入った。

だいじょうぶだいじょうぶ、

もう何も起きない。

何しろあの紅倉美姫さんが保証してくれたのだから。

電車が入ってきた。

乗り込むと、乗客はすいぶん少なかった。

ほんの4、5人か。

ラッキーと思つてふだんは座れない椅子に座った。

ふと、となりの車両を見て乗客がいつぱいなのを不思議に思った。

いくら時間がまだ早いとは言つても夕刻ではあれが当たり前だ。

何故、この車両だけこんなに空いているのだろうか？

扉が閉まり、電車が動き出した。

入り口に立っていた男性が反対の椅子によつこらしよと座つて里

香に向かい合った。

ニコツと笑いかけてきた。

くたびれたコートにカバンを抱え、50歳くらいか、頭が灰色で、

丸顔、メガネをかけて、腹周りはかなりでっぷりしている。

里香はぼんやり車窓から外の景色を見ていた。

気付くと、男性はまだニコニコ里香を見ていた。

里香は思わずスカートの裾を気にした。見えてない。

『なに、このおじさん。やだなあ』

『まあそう言うな』

里香はギョツとした。

『ハハハ。そう驚くな。いや、しかし嬉しいな。そうか、君か。と

死神はあなたよ！

うとうと見つけたよ』

里香は驚いてキョロキョロした。

『ハハハ。わたしだよ、わたし。分かっているだろう？』

里香は恐る恐る向かいの男性を見た。

『そうだよ、わたしだよ』

里香はガクンと椅子からずり落ちそうになった。

喋ってる、心の中で、このおじさんと！・・・

恐怖が、冷たく浸食してきた。

『ああ、見つけた。嬉しいよ。わたしはずっと捜していたんだ、こうして話の通じる相手を』

どうして、どうして、心が通う！？

『そうだ！心が通い合っているんだ、僕たちは！ ああ、なんて素晴らしい！

さあ、もっと心を通わせ合おう。さあ、僕の心を君に見せてあげよう！』

男性の心がなだれ込んできた。

黒い。

里香は戦慄し、全身から汗を玉と噴き出させた。

死が、死が、死が、

死が、

死が、

死が、

少女たちの死が、

溢れかえっていた。

里香はガクガク震えた。

失禁しそうだった。

男はニコニコ笑い、真つ黒な小さな瞳で里香をねめ回した。

『ああ、新鮮な恐怖。なんて心地いい・・・。』

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

君はあ・・・

素晴らしい。

君のそのフレッシュな感覚を、僕にも分けておくれ」

男は立ち上がり、歩いてくると里香のとなりに座った。

ガタンガタンガタン。

早く、早く、次の駅に到着して。

早く、早く、逃げなくちゃ！

「逃げる？」

男は里香の耳元で声に出して言った。

「どうして逃げる必要があるんだね？」

男は嬉しそうにうっふっふと笑った。

駅に着いた。

3人の乗客が降り、乗り込んでくる客は一人もいなかった。

ドアが閉まり、電車は発車した。

「やあ、出ちゃったねえ。君、なんで降りなかったの？」

ふっふっふっふ、とまた男は笑った。車内に誰もいなくなったのを見てふっふの声で言う。

「そうだよ、逃げることなんてないんだ。僕たちはこれからとっても楽しいことをするんだ。これから、ずうーっと、いっしょにね」

男は里香の手に触れようとし、思いとどまって引っ込めた。

「僕らはソウルメイトなんだ。肉体が目的じゃあない」

何を言ってるんだこの男は？

芙蓉さん、紅倉先生、助けて！・・・

「ふうー。紅倉美姫、ね。思ったほど大した女じゃなかったな。40代前半？鉄道オタク？ 八八八、当たってるのはこのメガネくらいじゃないか？ 僕は鉄道オタクではないよ。

でも彼女には感謝しなくちゃね、君をこんな風に覚醒してくれたんだから。ふっふっふっふ」

恐怖に固まる里香を男は辛抱強くゆっくり待った。

死神はあなたよ！

『楽しいよ、人を殺すのは。少女たちのあの悲鳴……、くうくう、最高に、気持ちいいーっ！』

イメージが、

少女たちの悲鳴が！

『ハハハ。心配しているのかい、僕に殺されるんじゃないかと？だ
いじょうぶ、安心しなさい。君を殺すのは一番後だ。殺して殺して
殺しまくって。もう殺すのにも飽きちゃって、自分を殺したくなっ
たら、僕たちはお互いを殺し合うんだ。それまでは、いっしょにた
つつつぶり、楽しもうよ』

だから、何を言ってる？

どうしてわたしが、

殺す？！

男の記憶が流れ込んでくる。

少女たちの、死の、悲鳴が……、頭から……、逃げなくちゃ、逃
げなくちゃ、どこに？どこにも、頭の中からは、どこにも、逃げら
れ……な……い……

「はい、そこまで」

男はギョツと顔を上げた。

イメージの流入が止まり、突然、強烈な薔薇の香りが鼻を突いた。
車両の隅に、白いロングコートに頭からフードをすっぽりかぶっ
た女性が座っていた。

フードを脱ぎ、

「電車なんて生まれて初めて乗ったわ」

紅倉美姫だった。

「もうこりこり。二度とイヤ」

ゴトンゴトンと電車は走り続けている。途中から乗ってきたので
はない。

どうしてこんな強烈な匂いにこれまで気付かなかったのか？

(誰も乗ってこなかったのはこの匂いのせいかな？)

死神はあなたよ！

「はいはい。喜んで運転手を勤めさせていただきます」

芙蓉もいた。吊革にぶら下がって。どうして気付かなかった！？
紅倉はニヤツと笑った。

「テレパシーに関してはあなたより数段スキルが上なの。相手の知覚を隠すくらいにね。却ってやりやすかったわよ、無防備なテレパシスト相手はね」

男は無然と立ち上がった。紅倉は平気で続ける。見えてない。

「里香さん。すべての元凶は、この男よ。」

この男が、死神なのよ。

あなたはあのかわいそうなOLさんの後ろでこう呟いた、

『あゝあ、家になんか帰りたくないなあ。。。帰ったっていいことなんてなんにもない。生きていたっていいことなんて何も無い。苦しいだけだ。あゝあ、まったく、この世は地獄だ』

と。彼女は、その通りだ、と思った」

里香は、本当にバケモノでも見るように男を見上げた。紅倉は続ける。

「あのおじいさんもそう。横断歩道まではまだずいぶんある。おじいさんは疲れていた。そこへあなたは反対側から渡ってきて、おじいさんにこう言った。

『やあ、こんにちは』

おじいさんは挨拶を返し、ごく当たり前のように、自分も反対側へ渡りだした。

あなたは、その様子を横目に見て、ニヤニヤ笑いながら駅へ向かった」

男はその時のことを思い出したのか、凶悪な笑いを浮かべた。

「この人が・・・死神・・・」

里香は移動しようとお尻をずらしたが、男にニコリと笑いかけて動けなくなった。

紅倉は続ける。

「そうそう、犯人の特徴だけど、平均を言っただけよ、二人のね。」

死神はあなたよ！

テレビであなた方を特定しちゃったら、自棄になって急いで次の犯行をするかも知れないじゃない？

あなた方が怪しまれることなく幾度も犯行を重ねられた理由、それは、

あなた方が二人のチーム、タクシーの運転手とその客だったからよ。

ゲストの女の子がタクシーって言ったときにはちよつと焦っちゃった。

ふつうお客を乗せているタクシーの運転手が、通り魔殺人の犯人だなんて誰も思わないわよね。

あなたの相棒、若い方の個人タクシー運転手は、今頃警察に逮捕されているはずよ。

あなたは、ちよつとやつかいそうだったんでわたしが出てきたんだけど、ハアツ、イヤだわ、こういうの」

男はブルドックみたいに鼻の上にしわを寄せて紅倉を睨んでいる。「あなた方は気の合う同好の士。二人でタッグを組むに当たって、まずお互いに試験を課した。まずは、お互い単独で一人ずつ殺す。

手口のまったく同じ連続殺人事件。犯人は同一のはず。しかし、最初の二つの事件、その一つずつにあなた方は完璧なアリバイがある。その時点ではまだそれが連続殺人とは報道されていない。模倣犯はあり得ない。よって、あなた方は犯人とは見なされない。

ああ、その最初の事件に、あなたは電車で出張したのよね？」男の目に怒りと憎悪がありありと浮かんでいる。

「ちくしょう・・・」

「『ぶつ殺してやる』？ 無理ね、用心深いあなたは日頃から凶器になるようなものを持ち歩いていたりしないわ」

男は、さりげなく体位を整え体を緊張させている芙蓉を見た。

たしか芙蓉は合気道の達人と言うことだ。

男の視線が、里香を向いた。

『これが最後だ！』

男は鬼の形相で里香の首目がけて両手を伸ばした。

「キヤーツ」

「うっ、」

男は、何故か後ろに反り返り、苦しそうにもがいていた。

里香は恐る恐る目を開いて男の苦しみを見た。

ソウルメートの里香には見えた、

男の体を、数人の血まみれの少女たちが押さえつけているのを。

「うぐぐぐぐ……ぐが……」

男のこめかみの血管が異常に膨張し、顔が真っ赤に腫れ上がった。

やがてどす黒く変色し、耳から血を流して男は床に倒れた。

駅に着き、ドアが開き、乗り込んでこようとした乗客たちは真っ

黒な、恐ろしい形相で倒れている男を見て悲鳴を上げて後ずさった。

やがて駅員が駆けつけ、定刻を過ぎても電車は発車しなかった。

芙蓉が里香の手を取って男の死体から離れさせた。

紅倉が謝った。

「里香さん、ごめんなさい。あなたをこんな目に遭わせちゃって、でも、

これがあなたの本当の不安の原因だったの。

この男はずっとあなたを求めて犯行を繰り返してきた。

前世で、この男は、あなたの父親だったの。

あなたは前世で、この父親に殺されたの」

共犯である個人タクシー運転手は紅倉の言ったとおり同じ頃に逮捕された。

彼は独身で、まだ25歳だった。

しかし主犯格の男、旅行雑誌のルポライターは、結婚をしていた。

14歳の娘がいた。

男のパソコンには犯行現場で撮影されたデジタル写真が相当数保存されていた。

死神はあなたよ！

中には、被害少女の体に、自分の娘の顔を合成させた写真もあった。

男がいずれ自分の娘を殺すつもりがあったのか・・・、少なくとも願望は強くあったようだ。

しかし、そもそも、

通り魔殺人に共犯などありえるのだろうか？

ありえる、のだろう、

今の世の中なら。

どんなに特殊な嗜好の持ち主でも、それがどんなに少数派であろうとも、

出合いの場はいくらでもある、

ここに・・・・・・・・。。。

話変わって、

野辺山真衣。

夜、布団にくるまって、彼女は震えていた。

教祖様としてさんざん利用してきた級友のあの狂乱・・・。

呪いが、

自分の身に降りかかってくることを、今さらながらに恐れているのだ。

彼女は否定できない、呪いの実在を・・・。

黒い影が、

じつと真衣を見ていた。

気付いて真衣はひいいと息を飲んだ。

影は血走った恐ろしい目で真衣を睨んでいた。

「だ・・・だれ・・・？・・・」

涙ながらかるうじてそれだけ言った。

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

影は答えなかった。

ズカズカ歩いてくると、

影は真衣の頭を鷲掴みにして引き起こした。

「ひいいいっ」

悲鳴を上げた。

「お父さん、お母さん、助けてーっ！！！」

しかし、起きてきてくれる気配はない。

真っ黒な影は凶暴な目で真衣を睨んでいる。

「い、いや・・・なんで？・・・た、たすけてよぉ・・・」

影は口を開いた。真っ赤な歯茎に、長い犬歯がによつきり生えていた。

「た、たすけ・・・」

助けを求める真衣は、自分がちゃんと布団に寝ているのを発見した。

夢？

夢でも怖い。

意識はこんなになハッキリしている。

自分は、生き霊を引き出されたのだと、理解した。

「た、たすけて・・・あなた・・・だ・・・だれ？・・・」

ものすごい力が首を締め上げた。

苦しい・・・。

混濁していく意識の中で、真衣は相手が女であることを知った。

この女も・・・、

また・・・。

都内某高級住宅街にある広壮な一軒の屋敷。

紅倉美姫と芙蓉美貴はそこに住んでいる。

紅倉の潤沢なスポンサーの持ち物だ。

紅倉はベッドにぐったり寝込んでいた。

死神はあなたよ！

柄にもなくアクティブな活躍をして、人混みのなか気を張って、ただでさえひ弱い体がすっかりまいっている。

夜も遅いが芙蓉がかいがいしく紅倉の看護をしていた。本来紅倉は完全な夜型人間なのだ。

眠る様子のない紅倉に芙蓉は話しかけた。

「センス、わたし、どうもすつきりしないんですけれど」

「なあに？」

「里香さんの前世って、本当にあの男の娘だったんですか？」

あの男にしても、結果的にうまくいったにしろ、何故殺人を犯すのに本来危険な共犯なんて使ったんでしょう？」

「知らない」

「それにどうしてわざわざ里香さんをあんな目に遭わせる必要があったんです？」

「カゴの中におびき寄せるためのエサ……って言ったなら怒られる？」

「怒ります。あんな男、警察に任せておけばよかつたじゃないですか？」

「それじゃあ、わたしの腹の虫が治まらない」

「先生が人を殺すところなんて、見たくありません」

「わたしは何もしてないわ。あの男が自分の罪の重さに勝手に自滅しただけ」

芙蓉は信用しない。疑いの目でじつと紅倉を見つめた。

「何故里香さんをあんな目に遭わせる必要があったのか？」

「そもそも里香さんの不安や強迫観念はどこからもたらされたのか？」

先生、

わたしはあの日あの時刻、先生の指示であのホームにいました」

「……」

「知っていたんですよね、あの男がああ場所に現れるって。」

里香さんのことも知っていたんですか？」

ソウルメートって、なんですか？」

前世で殺された記憶が甦ったにしろ、何故自分から死ぬような行

動を取ったんです？

里香さんをあんな目に遭わせたのは、

先生の警告だったんじゃないやありません？

悪は滅びる、って。

里香さんの前世って、むしろ・・・」

紅倉は芙蓉の唇を人差し指で押さえた。

「いいのよ、前世なんてただの記憶。けっして思い出されることのない、ね。」

今現在の生まれ変わりに当然影響はあるけれど、人は生きる環境を選べないのは誰にとっても同じこと。与えられた環境でどう生きていくかはその人次第。

だから、前世なんか知る必要はないし、生きていく上でなんの関係もないのよ。

それに、人を呪い殺せるような強い念力、普通の人間が持っているはずないわ」

「はあ・・・」

「ま、しかし・・・わたしは人の復讐心にはわりと寛容なの。それも適当なところで満足してくればの話だけど・・・」

紅倉はじつと虚空を見つめている。その赤い瞳で何を見ているのか・・・

「センス」

芙蓉が紅倉のごく薄い現実の視界に無理やり顔を割り込ませた。

くつつきそうに近い。

「いけない趣味はその程度にして、お休みのキスしてあげますからさっさと寝てください」

芙蓉は紅倉の額に口づけした。

「お休みなさい」

「お休み」

灯りが消され、芙蓉は部屋を出ていった。

しかし、紅倉の瞳はまだ赤い。口許にはうっすらと笑みが浮かん

でいる。

小岩井里香も眠っていた。

もはやなんの心配事もなく。

楽しい夢を見ているのか、その口許には紅倉とよく似た笑みが浮かんでいた。

おわり。

死神はあなたよ！

最終章 黒い影（後書き）

ありがとうございました。

死神はあなたよ！

死神はあなたよ！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9399c/>

死神はあなたよ！

2009年4月22日16時16分発行